



詩味礼讃

好詩家たちの対話 ⑪

ナビゲーター マーサ・ナカムラ
ゲスト マーク・ウィンチェスター

ではないか」と訳しています。展示内容は、アイヌの三大歌人と呼ばれるバチラー八重子、違星北斗、森竹竹市の作品やゆかりの品、八重子や竹市の日常を写した掛川源一郎の写真などを通して、彼らが生きた時代のアイヌが置かれた社会状況や歴史について振り返ることができるようになっています。

マーサ 本場に盛りだくさんな内容で、時間があつたらもっと見ていたと思います。いろんな栄養をもたらったという気持ちで展示室を出ようとしたら、出口のところマークさんの写真があつて、マークさんも展示を担当されたんですね。

マーク 「アウトリオピッタ」では、三人の詩歌人本章ごとに分けて紹介しているのですが、私は第三章の森竹竹市の展示を担当しました。実は博士論文でも、あるアイヌの詩人を取り上げたことがあつて、今日はアイヌの文学について、いろいろなお話ができればいいなと思っています。

マーサ 博士論文で取り上げた詩人は、なんという方ですか？

マーク 佐々木昌雄さんという方で、一九七〇年代にアイヌの若者たちが発行した『アヌタリアヌへわれ

詩人のマーサ・ナカムラさんとゲストとの歓談を通して、詩の味わいや、味わい方の多様さを探る連載「詩味礼讃 好詩家たちの対話」。第十一回のゲストは、国立アイヌ民族博物館で開催された「アウトリオピッタ アイヌ文学の近代―バチラー八重子、違星北斗、森竹竹市―」（二〇二三年六月二十四日～八月二十日）の展示に携わったマーク・ウィンチェスターさんです。

思わず閉じてしまった詩歌の本

マーサ 対談の前に展示を見させていただきましたが、タイトルにある「アウトリオピッタ」とは、どういった意味なんでしょうか。

マーク 「アウトリオピッタ」は、バチラー八重子の「ウタシパノ 仲良く暮さん モヨヤツカ ネイタパクノ アウタリオピッタ」という歌に出てくる言葉で、言語学者の金田一京助は「アウタリ」を「我が同族・同胞」、「オピッタ」を「皆々」、歌全体を「今は残り少なになりはしたけれど、相互に仲よく暮して行かう

ら人間」という新聞の、最初の編集責任者でもあります。彼は『アヌタリアヌ』の休刊（一九七六年）の頃に執筆活動を休止してしまうんですが、二〇〇八年に突如『幻視する（アイヌ）』という本を刊行していて、アイヌの現代詩に多少なりとも関心のある研究者の中には、彼を伝説的な人物だと捉える人もいます。

マーサ 私は早稲田大学在学中に、大学図書館のマンガコーナーでよく本を借りていたんですが、ある日、ピンとくるものがなくて何も手に取らずに振り向いたら、ちょうどそこが民俗学のコーナーで、アイヌ文化にまつわる本がたくさんあつたんです。

そこで私の道を開いてくれたのが、『カムイユカラと昔話』の著者である萱野茂さんで、初めてカムイユカラ（アイヌの間で口承されてきた神謡）を読んだときの印象は、「これ、誰がしゃべっているの？」でした。それまでに読んできた詩歌の語り手はどれも人間で、でもカムイユカラは、どう考えても人間ではないと思われる存在が話をしている。そこからいろいろと調べ、語り手が「神」や動物だとわかったときには感銘を受けました。以来、アイヌ文化にのめり込んでいったのですが、そんなときに東京・神保町の本屋街で、